



夢追人VI

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第51号(R5. 3. 16)

7年生、春の陽気をうけながらクラスマッチを楽しむ



15日、暖かい日差しを受けながら、7年生が最後の学年行事であるクラスマッチに汗を流しました。今のクラスで団結して臨む最後の行事です。グラウンドに立てられたネット越しに熱い戦いが繰り広げられました。また一つ、クラスのよい思い出ができたことでしょう。



授業研修の風景

今週は2本の公開授業が行われました。どちらもベテランの経験知豊富な風格のある授業です。また、どちらもICTを活用した授業でもありました。

今村先生(音楽)

今村先生によってICTを活用した最新の音楽の授業が行われました。Chrome Music Labを使ってメロディを作成し、お互いに鑑賞する授業が試みられました。



7年2組で行われた音楽の授業。アプリで作曲するために、複数の条件が提示されました。フォトメロディにするために4つの動物の写真。1枚を選んでイメージに合った旋律にしていきます。ソングメーカーのアプリを使って、イメージに合ったメロディに音を組み立てていきます。最先端のクリエイティブな授業でした。

二階堂先生(社会)

「あなたが大統領なら、世界恐慌に対してどういう対策を取りますか？」～二階堂先生のこの問いに対して授業が終わってもジャムボードに考えを打ち込んでいました。

河東中では、ベテランの先生方もICTを積極的に活用しています。世界恐慌はなぜ起こり、人々の生活にどう影響したのかを資料を駆使しながら、二階堂先生は丁寧に解き明かしていききました。その上で、最後は大統領になったつもりでその対応方法を考え、タブレットを使ってまとめていききました。



石には目もあれば耳も口もある ～ 石工・石積職人の不思議な世界 ～

人類史上、最も古くからある仕事の一つに石工(いしく、せっこう)という職業があります。石積み・石組み職人も含めて、自然石を加工したり組み合わせたりして、建築物や日用品を創り出していきます。石材は木材と並んで最古の建材で、昔から建物や橋、城壁などに使われてきました。世界的に有名なものとしては、ピラミッド・ギリシアの神殿・ストーンヘンジ・アンコールワットなどが有名です。九州では加藤清正公の熊本城の石垣などが知られています。

さて、今日のお話はこの石工にまつわる2つの話です。

剣豪と呼ばれた塚原ト伝(ぼくてん)にこんな逸話があります。武者修行で全国を旅していた頃の話です。ある時、大きな石がト伝の通りかかった道をふさいでいました。数人がかりでのけようとしたのですが、びくともしません。そこに、ある石工がやってきました。彼は一通り石を眺めた後、石の一点めがけ槌(つち)を打ち込みました。すると、大きな石はパカッとたちどころに割れてしまいました。どうしてそういうことができるのかと、ト伝は石工に尋ねました。「石には目があります。そこに槌を当てるとたやすく割れます。目でないところをいくら打っても割れるものではありません。」ト伝は、大いに感じ入るところがあり、剣の極意を会得したと言います。焦点を定めることの大切さ、一点集中の秘訣を習得したわけです。

話は変わって現代の石積職人の話です。滋賀県に粟田建設という石積の会社があります。織田信長が安土城を作った時に、城の石垣を組んだ穴太衆の末裔(まつえい)です。その13代粟田万喜三さんは石積の鬼と呼ばれた人です。息子の純司さん(14代)が万喜三さんの教えを伝えています。

『父はよく「石の声を聞け」と言っていました。「石と友達になったつもりで語りかければ自ずと積める」というのです。ただ当時の私は、いくら石の声を聞けと言われても、そんな馬鹿なことがあるものかだの、こんな将来性のない仕事いつだってやめ

てやるといった気持ちで、芯からは作業に身が入りませんでした。転機が訪れたのは、修行から5年経ったある日、安土城の石垣修理をしていた時のことでした。考え抜いた末に石を収めた時、なにか“コトン”という音が聞こえた気がしたのです。私はその時、石が「これでよし」と答えてくれたように感じました。いまが石の声というやつか。後で仕上がりを見てみると、やはりその石が収まりよく、落ち着いた雰囲気漂わせています。それ以降、私は「お前はどこに行きたいんや」と石に問いかけ、石の気持ちをよく聞くよう努めるようになりました。そして石の声に従っていくと、迷わずトン、トン、トンと置いていけるようになりました。」

また、孫の純徳さん(15代)も中学卒業後すぐに祖父である万喜三さんに弟子入りしたそうです。純徳さんはこう話します。

『祖父の仕事を見ていると、本当に石が「ここに置け」と話しているかのようにポンポンはまっていく。祖父はいつも石を見ていて、現場に着くとまずそこに残っている石を全部見て、昼飯後すぐにまた石を見ていました。どの石がどこに入って、その次はこれと、将棋のように何手も先を読む感じで考えながら見ていたんだと思います。それを見習い、僕も石をずっと眺めるということを常にやっています』

石組みは人組みにもつながるそうです。長年、石組みの仕事に命を懸けて人間国宝にもなった万喜三さんは、孫の純徳さんにこういう教えを残したそうです。

「穴太衆積みは人間社会にもつながるところがある。石垣を組んでいくには、大きい石もあれば小さい石もあり、きれいな石もあれば形の良くない石もある。これは人間社会と一緒だ。一人一人に役割があるのと同じで、どんな形の石にも必ず役割があって、無駄なものは一つもないのだから、上手に組み合わせさせてあげなさい。」

